



Title	談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム : 談話的時制解釈の観点からの分析
Author(s)	高橋, 克欣
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 11-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85029
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム

—談話的時制解釈の観点からの分析—

高橋克欣

1. はじめに

筆者は高橋(2016)において、一般的に容認度が低いといわれている *quand* 節の中に半過去が現れる用例の解釈メカニズムを統一的な形で説明することを試みたが、その中でじゅうぶんに論じられなかった問題もいくつか残されている。そこで本稿では、高橋(2014, 2016)で提唱した談話的時制解釈の枠組みを用いて、*quand* 節および *comme* 節において用いられる直説法半過去の解釈メカニズムに関する統一的な説明を行うことを目指す¹。本稿では *quand* 節および *comme* 節において用いられる直説法半過去が関与する現象を網羅的に扱うことはできないため、具体例の分析を通じて問題の所在を明らかにし、今後のより包括的な研究のための手がかりとしたい。

本稿ではまず、半過去全般に当てはまると考えられる解釈メカニズムについて説明したあとに、一般に主節との同時性を表す時況節であると考えられている *quand* 節と *comme* 節の特徴を確認したうえで、それぞれの時況節の機能と半過去との関係について談話的時制解釈の観点から論じる。

2. 談話的時制解釈の観点による半過去の解釈メカニズム

時況節の中で用いられる半過去について考察する前に、まずは半過去全般に適用されるべき半過去の解釈メカニズムを確認する。

筆者は高橋(2016: 66)において、半過去によって表される事態が談話の中でどのような形で定位を受けるかを説明するために「係留」という概念を用い、その機序に関して次のような仮説を提示した。

(1) 半過去の係留操作

半過去は過去時制であり、談話時空間内の過去に位置づけられる事態を表す。時間軸上に直接事態を位置づける「投錨」とは異なり、半過去による「係留」は相対的な操作である。半過去が安定した解釈を受けるためには、半過去によって表される事態を部分的な要素として含み持つ全体としての認識枠が解釈上設定される必要がある。(以下略)

このような解釈メカニズムを措定するのは、半過去が「非自立性」という意味的特性を持つためである。半過去の非自立性については、研究者により捉え方が多少異なる部分もある

¹ 本稿では直説法半過去のみを取り扱い、接続法半過去は考察の対象としないため、以後は直説法半過去を指し示すために「半過去」という語を用いる。

が、共通しているのは、半過去を単独で用いると解釈が不安定になるため、過去の時点を表す副詞句や他の自立的な過去時制とともに用いる必要があるという点である。

(2) *Hier à huit heures, Marie buvait un café.* (Sthioul 1998 : 207)

(3) *Paul entra. Marie buvait un café.* (*ibid.*)

(2) の文頭に置かれた状況補語や (3) で半過去が現れる前の文で用いられた単純過去は、半過去の解釈を安定させるための「支え」としてのはたきを担っていると考えられることができる。

主節に現れる半過去については、このような形の説明を行うことが可能であるといえるが、*quand* 節において用いられる半過去の解釈について、半過去が容認される場合と容認されない場合のちがいを統一的な形で説明するためには、文単位の解釈をこえた談話単位の解釈を考慮した「係留」という概念が必要となる。

半過去による「係留」の操作は単一のものではなく、「係留」が実現されるための方法にはいくつかの場合が考えられる。

典型的なのは、上の(3)のような教科書的な例が示す、完了相を表す他の自立的な過去時制によって半過去の解釈が支えられる場合である。

あるいは、次の(4)のように、主節で半過去が用いられ、*quand* 節で複合過去や単純過去が用いられる場合にも、同じような形で半過去の解釈が成立すると考えられている。

(4) *Quand nous sommes arrivés dans le salon, M. et Mme Moucheboulle étaient là (...)*

(Jean-Jacques Sempé et René Goscinny, *Le petit Nicolas a des ennuis*)

もちろん、常に自立的な過去時制が半過去に先立って用いられるとは限らず、特に物語の冒頭において半過去によって物語が開始されることは決して珍しいことではない。

(5) *Un ciel pur comme de l'eau baignait les étoiles et les révélait. Puis c'était la nuit. Le Sahara se déployait dune par dune sous la lune.* (Antoine Saint-Exupéry, *Courrier sud*)

このような半過去の解釈メカニズムを適切な形で説明するためには、談話の構築過程を考慮することが欠かせない。つまり、このような半過去は、物語の冒頭に現れているということが読み手には明らかであるからこそ解釈が可能なのである。東郷(2011 : 94)は談話の冒頭に現れる半過去の解釈について、次のように述べている。

(6) 話し手（書き手）は頭の中にこれから語ろうとする物語を持っています。最初の出来事が起きる時点を t_1 とします。すると物語の冒頭の場面における視点は t_1 にセットされ、 t_1 に

おける事態を半過去で語ることができます。(中略)これはいわば視点の先取りで、聞き手(読み手)をいきなり物語に引き込んで、次に起きる出来事を期待させる効果があります。

このように、半過去を用いて物語を開始することで読み手の期待を高める効果が生じるのも、半過去が「非自立性」という意味的特徴を持っており、半過去だけで語りが完成することはないからである。この場合、物語の冒頭において用いられる半過去が「係留」するのは、後に現れ、完了相を表す他の過去時制ではなく、視点がセットされる物語の時空間ということになる。

いずれにせよ、半過去は、それが実際に用いられる文脈において、談話解釈領域内の何らかの要素との間に関係性を築くことで安定的な解釈を得ることができる、というのが半過去全般に共通する解釈メカニズムである。

また、ここでもうひとつ重要なことは、(3)や(4)のように半過去が他の過去時制とともに用いられる場合、半過去によって表される事態と他の過去時制によって表される事態との間には、一般的に時間的同時性の関係が成立する、という点である²。

このように、半過去自体が「同時性」という意味的特性を持っていることから、主節との同時性を表す時況節と半過去との関係は整合的であると考えられそうであるが、必ずしもそうであるとはいいきれないことに注意する必要がある。そこで次節では、主節との同時性を表す時況節について概観する。

3. 主節との同時性を表す時況節

フランス語において主節との同時性を表す時況節には、次のようなものがある³。

quand, lorsque, dès que, aussitôt que, chaque fois que, toutes les fois que, à mesure que, au fur et à mesure que, pendant que, tandis que, alors que, au moment où, tant que, aussi longtemps que, depuis que

これらの時況節はいずれも、時況節によって表される事態と主節によって表される事態との時間的關係が「同時性 (simultanéité)」であるという共通性があるとはいえ、その「同時性」の概念自体がまったく同一であるわけではないため、どれもが互いに置換可能であるとは考えられず、それぞれの時況節に固有の意味的・統語的特徴がある。そして、これらの時況節は語りの展開に合わせて語りの時空間内に種々の事態を適切に配置する役割を果たしている。

興味深いのは、これらの中で quand 節と comme 節はどちらも主節に対する時間的同時性

² ただし、この時間的同時性は半過去の解釈において常に成立するものではなく、そのため「同時性」を半過去の本質とは考えない研究者もいる。

³ Poisson-Quinton, Mimran et Mahéo-Le Coadic (2008 : 277-282) から引用した。

を表すという意味的特性を持ちながら、いくつかの観点から互いに対照的な特徴を持っているという点である。そのような特徴が際立つのは、これらの時況節で半過去を用いる場合であり、次節以降では半過去の解釈メカニズムとこれらの時況節の談話上ではたらしに着目し、具体例の考察を通じて、半過去、*quand* 節、そして *comme* 節それぞれの特質に関する理解をさらに深めるための手がかりを明らかにしたい。

4. *quand* 節と半過去

よく知られているように、先行研究では *quand* 節の中で半過去が用いられることはまれであるとされている。先に述べたように、半過去が「同時性」という意味的特性を有していることを考えれば、このことは意外なことであるように思われる。

高橋(2016)において論じたことであるが、*quand* 節における半過去のふるまいを文単位で考察し、容認度の判断を行った結果を見ると、*quand* 節には半過去に対する使用制約が存在するということが誤りであるとはいえない。

しかしながら、高橋(2016)において談話的時制解釈の観点から具体例の分析を示したように、文学作品などにおいてそのような例が見出されることは「まれ」といえるほどに例外的なことではない。つまり、*quand* 節および半過去のはたらしを見極めるためには、談話単位での観察と考察が欠かせないということである。

これは、先行研究において、例外的に用いられることがあると説明されている例についても同様である。たとえば、朝倉(2005:439)では、*quand* 節の中で用いられる半過去について「*être* と年齢の表現 *avoir... ans* のほかはまれ」と述べている。この記述自体は誤りであるとはいえないが、このような例文の解釈メカニズムをより深く理解するためには、*quand* 節において *être* の半過去が用いられている例が現れる文脈に着目する必要がある。

(7) Laure la regardait sans comprendre. Jeanne pelait une pêche et paraissait réfléchir. Elle goûta un morceau et tendit le fruit à son amie.

- J'en ai déjà mangé deux *quand* tu étais au téléphone.

(Anne Wiazemsky, *L'île*)

ここではたしかに *quand* 節の中で *être* の半過去が用いられているが、この *quand* 節が表している「あなたが電話していたとき」については、この場面よりも前の段階でまとまった分量の具体的な描写がなされており、聞き手(読み手)は、この台詞を耳にした(目にした)ときに、この *quand* 節がいつのことであるのかを特定することが可能であるからこそ、この *quand* 節が解釈可能となるのである。

この例文において、主節の事態と *quand* 節の事態とは時間的に同時に生じていると解釈することができるが、それは *quand* 節において同時性という意味的特性を持つ半過去が用

いられたことによって生じたものであるといえる⁴。

5. comme 節と半過去

一方、時況節として用いられる *comme* 節には次のような特徴があることが知られている (朝倉 2005 : 417-419)。

- (a) <comme+時況節>の動詞は、例外を除けば半過去に限られる。
- (b) *comme* は時況節の継続動作と主節の瞬間的動作とを対立させる。
- (c) <comme+時況節>はいつも肯定である⁵。

(a)は、*quand* 節において半過去に対する使用制約が存在することを考え合わせると、*quand* 節とは対照的な特徴であるといえる。(b)については後ほど詳しく論じるが、この点が *quand* 節とは異なる、時況節としての *comme* 節に固有の機能であると考えられる。

comme 節が前置される場合には時況節であるかあるいは原因節であるかの判断が難しいこともあるが、次の例は時況節として解釈される例である。

(8) Un jour, *comme* je tapotais pitoyablement sur la machine, je levai les yeux et je vis ma supérieur qui m’observait avec consternation. (Amélie Nothomb, *Stupeur et tremblements*)

ここでは文頭に Un jour「ある日」という時況表現が置かれていることから明らかなように、この場面は、談話上これ以前にすでに登場した場面を受ける形で述べられたものとは解釈されず、このような場合には *comme* が用いられるのが自然であると考えられる。

6. 談話の解釈と時況節のはたらき

前節までに見たように、*quand* 節も *comme* 節も、主節との時間的同時性を表すという意味では同等の機能を持つ時況節とみなすことができるように思われるかもしれないが、それはあくまでも結果的にそのような意味効果が生じるということであり、談話における両者の基本的な機能は異なるものであると考える必要がある。以下では、両者の基本的な機能を談話的時制解釈の観点から考察する。

まずは *quand* 節の基本的な機能であるが、これは、主節によって表される事態を時間的な

⁴ *quand* 節の中で半過去以外の時制が用いられると、*quand* 節は厳密な意味での主節との同時性を表さず、継起性などを表すこともある。

⁵ *comme* 節の中で半過去の否定形が用いられる場合には、原因節として解釈される。

たとえば、*Comme il n’y avait rien à manger dans la maison, Papa nous a emmenés en taxi au restaurant.* (Sempé-Goscinnny, *Le petit Nicolas a des ennuis*) は「家に食べるものが何もなかったので (後略)」となる。

意味で談話時空間内に定位するために、場面を設定または特定することである⁶。主節によって表される事態がいつどのような場面で生じたのかを明示するために、*quand* 節では談話時空間内の特定の場面に言及するのである。

そのためには、*quand* 節によって表される事態が、主節とは独立した形で解釈可能である必要がある。もしも主節に依存する形でなければ *quand* 節が解釈できないということになると、*quand* 節は談話上でその機能を果たすことができず、そのような文は容認されないことになる。

quand 節の中で複合過去や単純過去などの完了相を表す過去時制が用いられることが多いのは、これらが単独で用いられても安定的な解釈が得られる自立的な過去時制であるためである⁷。

(9) *Quand je suis arrivé à la maison, ma mère commençait à préparer le repas.*

(Hubert Mingarelli, *La dernière neige*)

(9) では、*quand* 節の複合過去によって「私が帰宅した」場面が明示され、その場面において「母親が食事の準備を始めようとしていた」ことが主節の半過去によって示される。これを主節の半過去の側から見ると、この半過去の解釈において「係留」先となるのが *quand* 節によって表される事態ということになる。

一方、*quand* 節の中で半過去を用いる場合には、主節の事態とは独立した形で、半過去の解釈が成立する必要がある。このことを談話的時制解釈の観点から説明するならば、半過去の「係留」先が主節の事態であってはならないということになるが、このような解釈が可能となるためにはいくつかの方法が考えられる。

先ほど見た(7)の例では、*quand* 節の半過去の「係留」先は、この場面に先行する文脈上の一場面ということになる。

(7) *Laure la regardait sans comprendre. Jeanne pelait une pêche et paraissait réfléchir. Elle goûta un morceau et tendit le fruit à son amie.*

- *J'en ai déjà mangé deux quand tu étais au téléphone.*

(Anne Wiazemsky, *L'île*)

また、朝倉(2005)における「年齢の表現 *avoir... ans*」の場合には、我々がこの世界について共通して認識している百科事典的知識を参照することによって *quand* 節の半過去の解釈

⁶ 「場面の設定」と「場面の特定」のちがいは、主節に対する *quand* 節の位置関係におおむね対応するものと考えられるが、詳細な考察が必要であるため本稿では詳しく論じない。

⁷ 高橋(2016)では、複合過去や単純過去などの自立的な過去時制による事態の定位操作を「投錨」と呼び、非自立的な過去時制である半過去による定位操作である「係留」と区別した。

が可能となり、このような半過去の「係留」先は共有知識の一部である「人間の一生」の概念であると考えられる。

これに類するものとして、次のような例の *être* の半過去の解釈も同様の形で考えることができる。

(10) Il s'appelait Henri, il est mort de maladie il y a très longtemps, quand Corinne *était* encore un bébé.

(Jean-Marie Gustave Le Clézio, *Printemps et autre saisons*)

この例では, *quand* 節によって表される事態である「コリンヌがまだ赤ちゃんだったとき」についての描写が先行文脈において具体的に示されているわけではない。しかし我々は百科事典的知識により, 人間にはみな赤ちゃんだったときが存在することを知っており, 言語文脈によらずともこの文を解釈することに困難は生じない。この例の半過去の「係留」先も, 共有知識の一部である「人間の一生」の概念であると考えることができる。

このように, *quand* 節において半過去が用いられる事例を観察すると, 半過去を解釈するためには主節以外の何らかの要素を参照する必要がある, それらは先行文脈や共有知識といった談話における解釈資源であることが分かる。

quand 節がこのような特徴を持つものに対して, *comme* 節の基本的な機能はもっぱら主節の事態と *comme* 節の事態との間に意味的な関係が成立することを示すことにあると考えることができる。*comme* 節の事態と主節の事態との間に成立する関係は, 時間的同時性の場合もあれば原因と結果という因果関係の場合もある⁸。

quand 節とは異なり, 主節によって表される事態を時間的な意味で談話時空間内に定位するために場面を設定したり特定したりすることは *comme* の基本的な機能ではなく, *comme* 節によって表される事態は, むしろ *quand* 節の場合とは対照的に, 主節と関連づけられた形で解釈される必要がある。これを談話的時制解釈の観点から述べると, *comme* 節において半過去が用いられる場合には, その半過去の「係留」先が主節の事態である必要があり, *comme* 節は半過去の「係留」先として主節の事態を指定する機能を持つ時況節であるということになる。

先ほど示した(8)の例においても, *comme* 節の半過去は先行文脈や共有知識とは関係なく, 後続する主節の事態と関連づけられ, 主節の事態との時間的同時性を表すものとして解釈されるのである。

(8) Un jour, *comme* je tapotais pitoyablement sur la machine, je levai les yeux et je vis ma supérieur

⁸ ただし, 本稿で問題にしているのは *comme* 節で半過去が用いられる例であるため, *comme* 節が原因節として解釈される場合であっても基本的には *comme* 節と主節の事態の間には時間的同時性の関係も成立している。

qui m’observait avec consternation.

(Amélie Nothomb, *Stupeur et tremblements*)

談話解釈上の観点から *quand* 節と *comme* 節における半過去のふるまいのちがいを説明すると、次のようになる。*quand* 節において半過去を用いて場面設定（または場面特定）の機能を果たすためには談話内に何らかの利用可能な解釈資源が存在する必要がある、必然的に *quand* 節中での半過去の使用は限定的なものとなる。その一方で *comme* 節において半過去を用いる場合には主節の事態との関係によってひとつの文の中で半過去の解釈が成立するため、半過去の使用は特に問題とならない。

7. 結論と今後の課題

本稿では、時間的同時性を表す半過去が、主節との同時性を表す時況節と考えられている *quand* 節および *comme* 節の中で用いられる場合のふるまいのちがいを説明するために、これらの時況節の談話解釈上の機能と半過去の解釈メカニズムについて論じた。

主節との同時性を表すという共通点を持つ *quand* 節と *comme* 節それぞれの談話上の機能は異なっており、*quand* 節は場面設定（または場面特定）の機能を持つのに対して、*comme* 節は主節との間に時間的同時性や因果関係などの意味的關係が存在することを示す機能を持つ。このことから、それぞれの時況節における半過去のふるまいも異なることを具体例の分析により示した。

なお、今後明らかにすべき問題のひとつに、*quand* 節と主節の両方で半過去形が用いられた構文の解釈メカニズムはどのようなものであるのか？という問いがある。

先行研究では、主節と *quand* 節のどちらにも半過去が用いられている例の多くは反復・習慣解釈を受けると説明されている。ところが、次の例における主節および *quand* 節で用いられている半過去は 1 回限りの過去において展開中の事態を表していると解釈することが可能である。

(11) Plus tard, il *marchait* vers nous, dans le hall de l’hôtel, *quand* nous *attendions* assis l’un à côté de l’autre, sur le canapé.

(Patrick Modiano, *Accident nocturne*)

このような場合の *quand* 節の半過去の解釈メカニズムについても、主節の動詞が複合過去や単純過去の時と同様に捉えることができるのではないかと考えられるが、さらに多くの例を検討したうえで論じる必要があるため、今後の課題としたい。

また、主節に対して *quand* 節が前置される場合と後置される場合とで、構文の解釈メカニズムにちがいはあるのか？というのも、重要な問いである。

これらの問題について適切な説明を与えることは、とりもなおさず半過去の解釈メカニズムをより精緻な形に発展させることにつながるものと考えられるため、稿を改めて論じることとしたい。

参考文献

- Poisson-Quinton, Mimran, Reine et Mahéo-Le Coadic, Michèle. (2008) *Grammaire expliquée du français, Niveau intermédiaire*. CLE international.
- Sthioul, Bertrand.(1998) Temps verbaux et point de vue. Jacques Moeschler *et al.* (éds.) *Le temps des événements : pragmatique de la référence temporelle* :197-219. Éditions Kimé.
- 朝倉季雄（木下光一・校閲）(2005)『フランス文法集成』白水社.
- 高橋克欣(2014)「時を表す副詞節における半過去と談話的時制解釈」春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線』2:pp.331-368.ひつじ書房.
- 高橋克欣(2016)『「こと」の認識「とき」の表現 - フランス語の quand 節と半過去』京都大学学術出版会.
- 東郷雄二(2011)『中級フランス語 あらわす文法』白水社.